シャルル・デュトワ& N響
ザルツブルク音楽祭に鮮烈なデビュー！

世界最高峰の音楽祭として知られる「ザルツブルク音楽祭」。
名だたる音楽家・オーケストラが世界中から集まるなか、N響は日本の常設オーケストラとして初めての出演を果たした。華やかな会場に響く、緊迫感みなぎる演奏。輝かしく記念すべき一夜となったその一部始終をレポートする。

文｜中 東生

8月25日、ザルツブルクのフェルゼンライトシューレでデュトワ＆N響は音楽祭デビューを飾った。現地での関心は高いようで、前日のザルツブルク新聞にも期待を込めた記事が大きく掲載されており、また、祝祭劇場の門番に「NHKとは何の略ですか？」「挨拶は日本語で何と言えばいいのですか？」などと尋ねられたりもした。

赤絨毯の上にタクシーから颯爽と降り立つ着飾った聴衆が集まり始める中、音楽祭芸術総監督のペレイラ氏、新曲を委嘱された細川氏ご夫妻と挨拶を交わすサイモン・ラトル、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団のコンサートマスター樫本大進氏などの姿も見られた。「ザルツブルクの鹿鳴館？」と思わせるような、木を基調にしたクラシカルなホワイエを抜け、フェルゼンライトシューレ（岩窟乗馬学校）という名前通り、岩肌がむき出しになっている会場に入った。

人種を越えた壮大な音楽を感じさせるプログラム

古代野外劇場のバルコニー席のような舞台奥を青いライトで強調した西洋的なその空間は、1曲目の武満徹作曲《ノヴェンバー・ステップス》で完全に、洋の東西や時代を越えた。舞台から会場全体に充満していく研ぎすまされた集中力に心地よく包まれ、会場は一体となっていく。デュトワ氏は日本人の立場で舞台に立っているのだろうか？いや、人種を越え、N響をはじめ、日本人全体を見守っているような指揮姿だった。

2曲目は、当音楽祭が細川俊夫氏に委嘱した《嘆き》で、東日本大震災による津波で失った子供の遺体を、祈りながら探す母親の写真に心を打たれた細川氏が、その悲しみを浄化させたいという祈りを込めて作った曲である。海を表現するというオーケストラの音を背景に、ザルツブルク出身の詩人トラークルの遺作の詩が、ソプラノ歌手のアンナ・プロハスカによって語られ、自然と歌に変わっていく。人間という存在の寂寥感をも海は飲み込んで存在し続ける。自然は制覇できるようなものではなく、共存すらできない、側にそっと存在させて頂くという姿勢が人間としての正しい生き方なのではないか、と知らしめるような壮大な音楽であった。

後半では《幻想交響曲》のタクトが降りるとすぐに、会場はフランスの匂いに包み込まれた。「デュトワ氏はきっとベルリオーズのような恋を経験したんだ」と確信を持たせる切ない恋心が鮮やかに紡ぎ出されていく。淡い希望はフレーズに乗って膨らんでいき、しかし、期待が裏切られるようにフレーズも儚く萎んでしまう。舞踏会では優雅に踊り、牧歌的な魂の平穏を得られたと思わせた後の現実。厳しく冷たくギロチンの刃が落ち、邪悪な一種の狂気的世界が訪れる。それでも彼女を愛し続ける彼の、狂おしいほどの恋慕を感じさせる熱い演奏であった。

信頼関係に基づく息の合ったデュトワとN響のコンビ

デュトワ氏は翌日のインタビューで、N響の奏でた音を「優雅で色彩に富んだベルリオーズの音」と満足気に語ってくれたが、その色を駆使してなおかつ、テンポを自由に操る棒さばきや強弱の急激な変化のつけ方は、全曲を通して聴衆をゾクゾク、ワクワクさせることに成功した。優しさ、切なさ、懐かしさ、荘厳さ、邪気、全てが鮮やかに表現され、「絵画のような」を通り越し、立体的な人形劇や演劇を観ているような気分にさせる演奏だった。

「N響の楽員とはよい友達なんだ。これからもこんな関係を続けていきたい。」とデュトワ氏は語り、ツアーの合間に楽員と一緒にいられる時間を持てる事が嬉しいという。素晴らしい音楽家同士の関係に加え、そのような友情があってこその素晴らしい共演だったと言えよう。

（なか・しのぶ　音楽ジャーナリスト）

左からデュトワ、細川、プロハスカ

N響との友情を語るシャルル・デュトワ

©Wolfgang Lienbacher（8、9ページの全写真）